

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

*** ヒルガーの分光器を天文機器資料館に搬入、展示、そしてその創意工夫**

基線尺倉庫にヒルガーの分光器があることに気がついたのは、2008年4月にアーカイブ室が置かれ、基線尺倉庫を漁り始めた頃の事であった。この分光器は筆者が岡山天体物理観測所から三鷹の東京天文台にやってきた頃に、旧本館(二)の分光部の大実験室にあった事を覚えている。旧本館(二)は畑中武夫先生が率いていた分光部の城であった。49歳の若さで畑中先生が亡くなられた後、分光部は大沢清輝教授、斉藤国治教授、末元善三郎教授の3部門の教授先生方がおられた。末元先生は理学部天文学教室に移られ、旧本館(二)から分光部が新しく建設された北研究棟に引っ越したのは昭和41年(1966年)4月であった。それから旧本館(二)の分光部が使っていた実験室を筆者らの実験室に使っていたが、その後、日本天文学会事務所が入ることになり、明け渡すことになった際、旧分光部が使っていたものを基線尺倉庫に運んだのである。我々が旧分光部のものを運び入れる時には、基線尺倉庫は空であったことを鮮明に覚えている。名前の元である基線尺は国土地理院が持ち去りそれらが載せてあった大きな木製の棚が東と南の壁際に残されていた。そこへ旧分光の末元先生たちがいた部屋にあった金属製の棚を持ち込み旧分光部で使われなくなったものを持ち込んだ。その中にヒルガー分光器があった。ヒルガー分光器は一番奥の棚に置かれていたし、非常に重いものだったので持ち出せないでいたのである(写真1、2)。



写真1



写真2

基線尺倉庫には次々ともものが持ち込まれ、この分光器が一番奥になっていたが、筆者がこの倉庫から子午儀などいろいろ持ち出し、この分光器にアクセスできるまでになっていたが重くて簡単には持ち出せなかった。分光器の上には写真2に見られるように写真乾板の木製の取り枠が数個置かれているのが分かる。

今回、PZT(写真天頂筒)を天文機器資料館(PMC:自動光電子午環棟)に移設する大工事のついでに基線尺倉庫に残っている大物2点(リーズのマイクロフォトメーター、ヒル

ガ-の分光器) を天文機器資料館に移すことにしたのである。PZT 移設を依頼した運送会社に追加発注してこれらも天文機器資料館に運び込んだ(写真3)。



写真3 天文機器資料館に持ち込まれたヒルガー分光器

ヒルガー分光器というと、思い出すのが岡山天体物理観測所開設時に 188cm 反射望遠鏡と一緒に購入されたクーデ分光器、カセグレン分光器2個がヒルガー・ワット製であった。188cm 望遠鏡はイギリスのグラブ・パーソンズ製である。ヒルガー・ワットもイギリスの会社である。ヨーロッパの会社はこのように会社の変遷でヒルガーがワットとくっついてヒルガー・ワットになるというようなことが他にも例があった。

この分光器はプリズム分光器で、スリット部、コリメーター部、プリズム部、カメラレンズ部、絞り部、写真乾板ホルダー部、これ等全てが揃っている。

写真4はスリット部、写真5はコリメーター部の焦点調節部である。



写真4 スリット部



写真5 コリメーター部

プリズム部は上部に開閉部(写真6)があってプリズムの後ろにカメラレンズがあり、絞り機構がある(写真7)、絞りは3個用意されている(写真8)。



写真6 プリズム部の蓋



写真8 3個の絞り

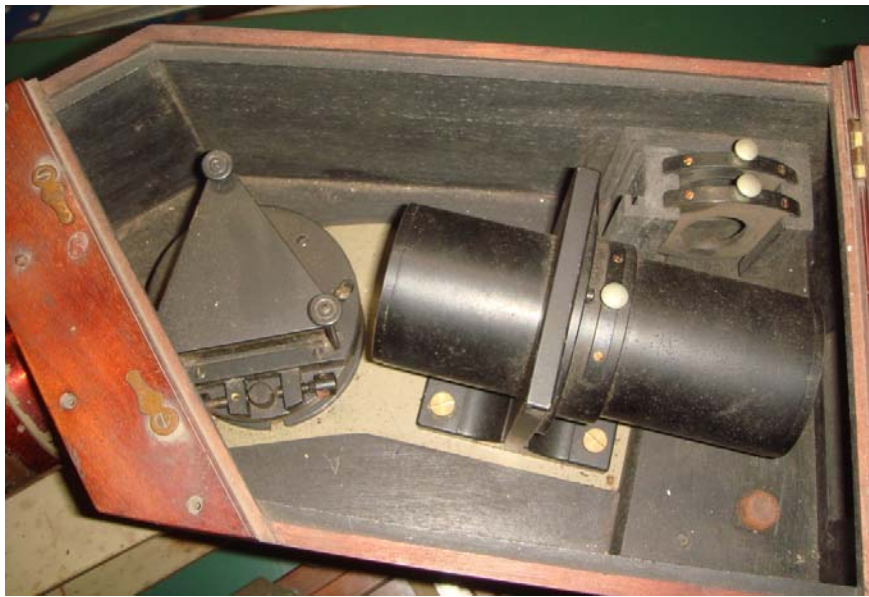


写真7 プリズム、カメラレンズ、絞り

この分光器の写真乾板は大きな角度（写真 9）がついており、ティルト調節機構（写真 10）がある。プレートホルダーは木製で6個用意されていた。



写真9 プレートホルダー取付け部



写真10 ティルト調節ネジ

いろいろ工夫された分光器だが、過去の遺物である。貴重な歴史の1ページだろう。